

法隆寺古瓦の調査（2）

平城宮跡発掘調査部

考古第三調査室では今年度、中・近世の軒平瓦について調査・研究を行なった。

鎌倉時代 1219年に始まる修理用の瓦243（唐草文）が前期の代表。そのほか連巴文、連珠文、剣頭文（204C）がある。平安後期以来の顎貼付け式段顎と折曲げ式段顎があり、同一種に共存する場合もある。各部位に離れ砂を付ける点、平瓦部凸面を格子叩きする例が存在する点も特徴。平安時代ない釘穴の出現は、屋根勾配が強くなったことと関連しよう。204Cには顎貼付け式段顎と新出の瓦当貼付け式段顎があり、後者の出現が後期（13世紀第3四半紀以降）の大きな等徴である。瓦当上縁と顎後縁にけずりをもつ。1318年建造の上御堂所用の274Aのように中心飾りが蓮華文の例も出現する。この頃珠文帯は消失しよう。

室町時代前期 前半の唐草文は各单位同士すなわち葦が連続するが、後半には分離し始める。中心飾りは蓮華文が残るが、宝珠文（267A）、半截花菱文（271F：1383年夢殿修理用）が出現する。圏線は残る。すべて瓦当貼付け式段顎である。離れ砂は瓦当面と平瓦部凸面に付着する。1344年西院鐘楼・経蔵造営用の255Aの平瓦部凸面の格子叩き目は最終の例。叩き具はすでに無文のものが主流となっている。瓦当上縁の半数以上にけずりがある。

室町時代中期 応永年間の修理瓦の中心飾りは半截菊花文を主体とする（272Ba）。凹面側の一侧縁に水切り用の背の低い縦棧をもつ螭羽用瓦も出現する。瓦当下縁がけずられる例が増加する。永享年間の修理以降の中心飾りは半截菊花文以外に、268B（1436年南大門再建用）の宝珠文と271Cの半截花菱文が主体となる。該期の宝珠文の両脇にはC字形と逆C字形の唐草が伴う。また、唐草文の外側に輪郭線風の線文が伴うのも特徴である。さらに、永享以降圏線も消滅する。凸面に瓦座固定用の横棧、凹面の両側縁にT字形の二の平瓦と軒丸瓦を固定するための縦棧を付けるのもこの頃である。中期はすべて顎貼付け式段顎である。離れ砂付着位置は前期と同じである。

室町時代後期 中心飾りは268Dbなどの両脇にC字形唐草が伴わない宝珠文と272Dなどの半截菊花文が主体である。後期後半の脇区比（脇区幅×2／瓦当幅）が約0.13と、脇区幅が広くなる。瓦当貼付け式段額が顎貼付け式段額になる。凹面の布目痕は完全になで消され、前代に凸面に付着した離れ砂は、ほとんど認められない。顎後縁のけずる比率が減少する。なお、後期末開始の慶長年間の修理時の中心飾りは（276Aのように）蓮華文か半截菊花文の退化したものになり、両脇の唐草文も単純化する。脇区比は若干大きくなる（0.13～0.14）。調整が丁寧なので確認は困難だが、平瓦の素材のタタラからの切断手法が糸切り手法からコビキ手法に変化するのもこの頃である。

江戸時代前期 蓮華系・菊花系唐草文（280C）は初期の主要瓦。元祿修理時には三葉葵唐草文（288Aa）や三宝珠唐草文（262B）がある。脇区比が0.14～0.26となり、脇区幅が一挙に広くなる。すべて顎貼付け式段額である。瓦当下縁はほとんどけずられなくなる。

江戸時代中期 菊花系唐草文（278B）を主体に、若干の宝珠唐草文（268J）があり、後半の安永年間に後期に主体となる橘唐草文（284E）が出現する。脇区比が0.35～0.40となり、脇区幅が一層広くなる。瓦当上縁以外のけずりは衰退する。

中・近世軒平瓦拓本（1：8）

江戸時代後期 橘唐草文（384H）を主体に、宝珠唐草文（268K）、元祿修理瓦288Aaの范型の切縮め品などがある。脇区比は0.40～0.50。すべて顎貼付け式段額である。屋根野地板への瓦の固定法が鉄線の先に結んだ釘に代わるので、釘穴が径の小さい針金穴になる。

法量 瓦の法量の上でも時間的変化が認められる。鎌倉時代の瓦当幅は9寸～1尺、全長は1尺2寸程である。その後、両者の値いは徐々に減少し、江戸時代後期の瓦当幅は7～8寸、全長は8～9寸になる。中・近世を通じて顎の深さは、1～4.5cmの幅にある。鎌倉時代の顎幅は3～5cmで、その後次第に減少し、江戸時代後期には1～2cmとなる。瓦当湾曲比（上弧深／瓦当幅）は、鎌倉時代～室町中期が0.15～0.18、室町中期～江戸前期が0.15、江戸中期が0.13、江戸後期が0.10～0.11となり、時代とともに湾曲が弱まる。

（佐川正敏）

中・近世軒平瓦の法量